

発行 一般財団法人 田澤記念館
住所 佐賀県鹿島市大字高津原434番地
発行責任者 小池 幸照
発行所 鹿島印刷株式会社
発行日 2021年1月15日



新年あけましておめでとうございます

代表理事 小池 幸照

年末からの寒波で、例年になく寒い正月でした。昨年から続くコロナの猛威も収まることを知らず、まだまだ終息を見せる気配がありません。どうぞ皆様方、健康には十分気をつけお過ごしください。

コロナ禍で、生活や仕事・学校も大きく様変わりしました。生活においては、うがい、手洗い、マスクは欠かせません。仕事では、会社に行かず自宅で仕事をするリモートワークが増えてきました。学校では、教室内が密にならないように隣の人と机の間隔を広くとり、感染を予防しています。また、大学では学内での対面授業はほとんど行われず、パソコン画面を通してのリモート授業が中心です。地方の大学生の中には、下宿を使っていなくても契約をしているため部屋代を払っている学生が多くいます。本当に困ったものです。

この状況下、一般財団法人田澤記念館も本来の事業や活動を縮小、変更して乗り切ってきました。密になることを避けるため、会議や研修はできるだけ少人数で行っています。

令和2年度、最初の事業は小学校から依頼があった出前授業でした。これは、学校からの要請でした。田澤先生の「一事貫行」について4月から早速始めたいので、その意味や取り組み方を教えて欲しいという依頼でした。

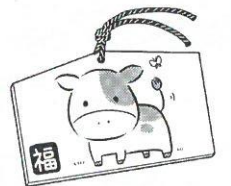
7月からようやく本来の活動に入りました。従来、5月からスタートするユースカレッジを7月から始めました。年間10回の研修を8回に短縮してのユースカレッジ研修です。今年度は鹿島市内の各企業や市役所から14名の青年が集まりました。開講式では、代表理事挨拶の後、研修生代表誓いの言葉があり、その後、松本真常務理事が田澤義舗についての簡単な講義をしました。令和2年はコロナの影響であらゆる場面が制限され、規模や時間が変わってきました。

この1年、「コロナ禍」という言葉をよく耳にしましたが、田澤も大正12年9月の「関東大震災」の惨状を協賛会館の屋上から見て、「天災避けがたく人禍免るべし」という論文を書いています。コロナ禍と人禍は比較することはできませんが、禍が日本中、世界中に押し寄せていることは事実です。新年から暗い話になりましたが、今年はコロナに負けず力強く生きていきたいと思いますというエールを皆さんに送りたいと思います。

昨年は、「田澤義舗生誕135年」でした。コロナ禍のため記念大会はできませんでしたが、田澤の特集を地元佐賀新聞が取り上げ11月24日(田澤の命日)に特集が組まれました。また11月29日には「子ども・若者育成支援県民大会」がエイブルで開催されました。

田澤義舗先生の地元ということで、田澤記念館の松本館長が話をしました。参加者からは「鹿島には、素晴らしい実践家がいたのですね」という感想をいただきました。

令和2年度も残すところ3ヶ月、本年度事業の締めくくりとまとめの段階になります。コロナに負けたくないようがんばりたいと思います。



「子ども・若者育成支援 県民大会」開催

11月29日(日)、鹿島市のエイブルホールにおいて、「子ども・若者育成支援県民大会」が開催されました。

この大会は、佐賀県青少年育成県民会議が中心となっておこなっている事業で、毎年1回各市町で順番に開催されており、今年度は鹿島市にて開催されました。参加者は、県内の市民会議・学校関係者・PTA・少年補導員・民生委員・保護士などです。次代の子ども・若者が心豊かに成長できるように指導者の研鑽の場として、活動に活かしていく事を目的としています。



講演の様子

この大会で、「今も生きる田澤の教え」という演題で、田澤記念館館長の松本真氏が講演を行ない、多くの方々に田澤義舗について知っていただくことが出来ました。

鹿島市青少年育成社会体験事業

「クリスマスリース」をつくるよ!



鹿島市からの委託を受け、鹿島市連合青年団と共同で計画しました。その第1弾として、12月13日(日)に、市内の小学生親子を対象とし、クリスマスリースづくりを実施しました。親子20組を募集し、密にならないように2回に分け、10組ずつ行ないました。材料はすべて自然の木の葉や葉っぱを使用しました。少し難しかったようですが、親子で協力しながら楽しい時間となり、素敵な作品が出来上がりました。

第2弾は、2月20日(土)に「フラワーアレンジメント」体験を予定しています。



親子で協力



青年団が指導

ユースカレッジ

例年より2ヶ月遅く、7月から始まった「ユースカレッジ」も、コロナ禍の中でプログラム等を工夫しながら、毎月行なっています。今回は、第2回・第3回・第5回までの講義の感想文を掲載いたします。講義の他にも視察研修として、鹿島市内の歴史探訪・さが西部クリーンセンター・肥前浜宿・下村湖人生家・大隈重信記念館・祐徳稲荷神社などを訪れ学びました。

～第2回 ユースカレッジ～ (令和2年8月19日開催)

講義「いのちの理由」 講師:中村一之氏

小学校・中学校・高校と「いのちの大切さ」について多くの講義を聴いて学んできました。その時は、いのちを粗末にはいけないこと、自分の命も周りの人の命も大切にすることなどを学んだ記憶があります。今回の講義では、いのちの理由(生まれてきた訳)、生き方について学びました。社会人になって、学生の頃よりも「自分はなぜ生きているのだろうか?」や「これからどんな人生を送るのだろうか?」ということを考える機会が多くなりました。講義では、仏教の考え方において、いのちは頂き物で、必ず終わりがくるものなので、生きている今を懸命に生きることが大事であると言われました。そして、生活信条「五ヶ条」が紹介されました。そこで、自分の信条は何だろうかと思いました。今までの人生を振り返り、これからの人生で大切にしていきたいことを考えました。①人を裏切るようなことをしないこと ②相手を否定することよりも理解するように心がけること ③自分の心に素直であること ④見返りを求めないこと を心がけていきたいと思いました。この4つの信条は、様々な経験を通して修正することがあるかと思いますが、今はこの4つを心がけて取り組みたいです。今回の講義をきっかけに、どのような生き方をしたいのか考えることができました。



講義 中村一之氏

～第3回 ユースカレッジ～ (令和2年9月16日開催)

講義「怖いお金の話」 講師:九州労働金庫 伊集院涼氏

伊集院さんの身近な体験談を交えたお話で非常に理解しやすく、自分にとっても身近なことだと感じることができました。本日いただいた資料の中にあつた就職から老後までの必要な金額を見た際に、今までは長くても1年や2年先のことでしか考えていませんでしたが、一度今後の人生に必要な経費を視覚化し、それをもって今の自分がどういった生活をすべきかを見直してみようと思います。またテレビのCMやネットショッピングをした際に出てくるリボ払いやカードローンの仕組みや本質(金利の面など)が理解でき、中身がわからないまま安易に手を出すことの危険性が分かったと思います。自分はあまり貯蓄が得意なタイプではないので、そういった事にも気を付け、かつ「残った分を貯蓄するのではなく、貯蓄額を決めてその残りで生活する」という言葉のように、財形を始めてみようと思いました。本質を知り、自分が今何が必要かを知って行動することはお金の面ではなく、これからの人生において、とても大切なことだと感じました。



講義 伊集院涼氏

～第5回 ユースカレッジ～ (令和2年11月18日開催)

講義「田澤精神を今に活かす」 講師:土井敏行氏

住んでいるのによく知らない、鹿島の今と昔について「そうだったんだ」と思いながら聴かせていただきました。鹿島おどりやガタリンピックは、市民なら知らない人はいないほど言わずと知れた一大イベントですが、その始まりや意味を知る人は、特に私たち世代では少ないかもしれないと思いました。また、ピオが市役所の跡地であることは知っていましたが、そのことを知ったのもつい最近でした。もちろん、大規模小売店舗法との絡みがあったことなどは知りませんでした。今回の土井議員のお話は、市民なら大人から子どもまで皆が知っている馴染み深いイベントや建物に関する歴史だったこともあり、身近で分かりやすく大変ためになる内容でした。同時に、こういった機会は市内の小・中・高校生にこそ必要ではないかと思いました。田澤精神にも掲げられている“郷土愛”を、進学等で鹿島市を離れる前の児童・生徒たちに持ってもらうことが、「一度離れる故郷に、いつか帰ってきて奉仕したい」という気持ちにさせる一助となるのではないかと思います。学校での「いわゆる勉強」の時間も必要ですが、そのうちの1時間を、今日のような“地域を知る”時間に替えることで、鹿島という地域が後々得られるもの(力)は大きい気がします。今日の講義は「へえ!」と思うことが多く楽しかったです。ありがとうございました。



明治神宮社殿

明治神宮鎮座100年

東京にある明治神宮が今年で100周年を迎えました。明治神宮は、明治天皇と昭憲皇太后をお祀りしている神社です。例年、初詣では日本一の参拝者数を集める神社としても知られています。

田澤義鋪は1915年(大正4年)30歳の時、内務省明治神宮造営局総務課長となり明治神宮の造営に力を注ぎました。彼は、この大事業にあたり全国の青年団へ協力を呼びかけました。田澤の呼びかけに全国から280団体、延べ11万人もの青年たちが集まりました。彼の青年たちに対する愛情と国を思う心に打た

れ、集まってきたのでした。

そして1920年(大正9年)に明治神宮と神宮の杜(もり)は完成しました。杜(もり)の木々は、その時に全国から集まった10万本もの献木によるものです。

また、これをきっかけとして全国の青年団の気運が盛り上がり、日本青年館の建設に繋がりました。その費用は、全国の青年団員が1円ずつお金を出し合ったものです。この頃から田澤義鋪は「青年団の父」と呼ばれるようになりました。